

グループワークとインターアクションから学ぶ「日本語コミュニケーション論」

許 明 子

1. 授業目標および内容

入門講義として開講された「日本語コミュニケーション論」ではコミュニケーションに関連する理論的な知識を学び、円滑なコミュニケーション活動について理解を深めることを目標としている。授業目標を達成するために、毎回の授業でコミュニケーション活動に関連する理論や先行研究を紹介し、それに関係するタスクを設定して受講生のグループワークを通して遂行していくように運営した。主な理論や先行研究は、初対面会話の特徴、異文化間コミュニケーション、自己開示、アイデンティティと価値観、接触場面のコミュニケーション、対人距離、空間と身体接触、対人コミュニケーション、あいづちとフィラー等に関連する内容である。

受講生同士のインターアクションとグループワークを行うために様々な身分の学生が受講できるようにした。本授業の受講生は、全学向け日本語プログラムの上級レベルの学生、短期留学生日本語プログラムの上級レベルの学生、上級日本語特別コースの日本語・日本文化研修生、APRU-VSEの上級レベルの学生など身分も学年も国籍も様々であった。

また、秋学期は基礎セミナーを受講している日本人学生も参加できるようにしたが、それによって日本語母語話者と学習者間の異文化間交流や異文化間コミュニケーションを行うことができた。各グループに必ず日本人学生が含まれるように工夫し、相互理解を深めつつ、お互いのコミュニケーション・スタイルについて気づきが得られるように運営した。

2. グループワークを通じた学び合いと気づき

2021年度も COVID-19の影響を受けて渡日できない留学生が多数受講していたため、Zoom ミーティングを利用してオンラインで実施した。各授業で取り上げる先行研究や理論の説明は教員による PPT で導入し、

グループワークの活動は Google slide, Jam board, Google Document, Padlet を共有し、共同編集しながら話し合った内容をまとめて報告するような流れで授業を進めた。これらのすべての教材やグループワークシートは Google Classroom にアップロードし、受講生全員が共有できるようにした。

秋学期は毎回の授業参加者が35名~38名で大人数であったため、各グループは3~4名、10~11グループを作った。話し合いの時間や報告する時間を確保すること、また受講生全員が話し合いや報告に参加できるようにするために様々な工夫を凝らした。例えば、毎回のグループ分けを授業開始前に事前に作っておいて、ブレイクアウトルームにスムーズに参加できるようにしたり、グループワークの報告者を事前に決めておくように指示したり、Comment Screen を使って各自のコメントや感想を即座に述べたり、質疑応答をしたりするなど様々なツールを活用して授業を進めた。

グループワークの進め方、受講生のアウトプット中心の活動例として9回目~12回目の進め方を紹介する。①(9回目の授業)4名1グループで、オンライン授業と対面授業の長所・短所について意見交換を行う。意見交換の会話を録画する。②(9回目の授業後)録画した動画を Classroom の Stream にアップロードする。③(10回目~11回目の課題)各自の動画を見ながら、受講生自身の会話を文字化する。受講生全員で Google Document を共有し、各グループメンバーの共同編集で会話全体をテキストデータとして整理する。④(課題)テキスト化した会話データについてコミュニケーション活動に関連するテーマを絞って分析する。分析結果を Google Slide にまとめて発表の準備を行う。⑤(12回目)グループ発表を行う。発表者以外の受講生は Comment Screen やチャットを利用してコメント、質問、感想を投稿する。発表のテーマは話し手としての役割、聞き手としての役割、発話量、配慮の仕方等、対人関係を意識したコミュニケーション活動に関するものが多く、グループワークを通して多く

のことを学んでいたことが分かった。

以上の一連のグループ発表を通して、グループメンバー間で活発な意見交換が行われていた。メンバー間で役割を分担し、メンバー全員が積極的にグループワークに参加していたことが分かった。

大人数の受講生がオンラインで参加する環境であったが、様々なツールを活用して参加型の授業運営を行ったことによって生の間で学び合いが多く、学習意欲が保持された結果につながったと思われる。大人数のオンライン授業形態となると、受講生は受動的な学習態度になりがちだが、本授業では外国人留学生も日本人学生も積極的に参加しており、活発なディスカッションが行われていた。

また、Zoom録画を見ながら自分自身の発話を文字起こしする過程で自分自身のコミュニケーション・スタイルについても客観的に捉えることができ、より良いコミュニケーション活動を行うための気づきを得られたことは大きな成果である。

3. 今後に向けて

本授業は入門講義として開講されていることから大学で学ぶ専門的な内容を紹介しつつ、受動的な学びではなく、受講生自身が能動的に学べるような授業運営を試みた。毎回の授業でグループワークを行い、インターアクションを通して学び合い、話し合った内容を共有することによって受講生全員が気づきを得るよう工夫した。学期末に実施した授業アンケートでは受講生の満足度が高く、色々な学生と話し合いができたことは高い評価が得られた。

しかし、受講生の人数が多く、毎回35名以上の受講生が参加していたため、受講生一人一人に対してきめ細かなケアはできなかった。また、受講生の管理等の教員の負担も大きい。今後、ポストコロナ時代にはさらに多くの留学生が受講する可能性があり、有効なクラス運営についても検討しておきたい。